

日本人学部生と留学生の質問者による 情報収集の談話展開の方法

— 応答者の質問者に対する印象評価と
フォローアップインタビューから —

Analysis of discourse on information collection by questioner of Japanese and foreign students: Based on the responder's Impression Assessments and Follow-up-Interviews

小林友美
KOBAYASHI Tomomi

小林友美
KOBAYASHI Tomomi

〔要旨〕

本研究の目的は、日本人学部生と留学生の就職活動の情報収集の談話を対象に、応答者が答えやすいと感じる質問者の談話展開の方法を明らかにすることである。応答者のチェックリストとフォローアップインタビューの印象評価を分析した結果、「質問の仕方」、「聞き手の役割」、「進行の仕方」の3項目で複数の特徴を見出した。情報収集の談話展開の方法は、多数の話題で「質問— 応答」を繰り返すよりも、一つの話題において、質問を重ねて掘り下げるような談話展開のほうが情報提供しやすいことが明らかになった。また、事実情報を聞く質問と意見を求める質問の提出順を考慮して準備すること、情報提供や相づちの他、感想や共感で反応する等、聞き手の役割を意識すること、メタ言語表現や前置き表現を効果的に使用し、唐突な話題転換を避けることも重要とした。この分析を通して、会話教育において、相互作用に基づいた談話展開の方法を学習する必要性を示した。

Key word: 情報収集、談話展開、質問者、印象評価、フォローアップインタビュー



1. 本研究の目的

本研究は、日本語の会話教育に応用するための基盤的研究として、日本語の情報収集の談話を対象に質問者の談話展開の方法を明らかにするものである。本研究の「情報収集の談話」とは、何らかの目的で、ある情報を必要とする質問者が、それに関する情報を有する応答者に対し、必要な情報を口頭で得るという一連のコミュニケーション過程のことである。国内在住の日本語学習者が日常生活を送る上でも、特定の個人や機関に対して口頭で情報収集をする場面は多々ある。例えば、初対面の場面や各種相談や問い合わせ、事務手続きやインタビュー調査等がある。また、近年、大学・大学院の卒業・修了後に、日本企業への就職を希望する日本語学習者が増加傾向にあり、就職活動の一環として企業説明会やOB・OG訪問等で情報収集をする機会も増えつつある。実際の情報収集の場面では、質問者が目標達成に向けて様々な情報を求め、相手が提供する情報に基づき、次の情報収集の過程へと進めるという談話展開をしている。そのため、より複雑な談話構造や質問表現をはじめ、様々な口頭表現の運用の習得が不可欠なものとなる。しかし、日本語教材には限られた文型や表現しか提示されておらず、授業では教師の発問と学習者の解答というやりとりが多く、質問すること自体を学習する機会が少ないように見受けられる。実際に筆者は、韓国語母語話者を対象にした会話授業のインタビュー活動において、「質問」と「応答」を繰り返す談話展開や唐突な話題転換等の課題を感じた経験があり、指導法について考える機会があった。また、質問をするという基本的な言語行動に関する研究や、情報収集という活動に関して、参加者の談話展開に焦点を当てた研究はさほど多くはないのが現状である。

そこで、本研究は、日本人学部生と留学生の質問者が、就職活動を経験した応答者に対して情報収集をする談話を対象とし、応答者の印象評価とフォローアップインタビューをもとに、応答者が答えやすいと感じる質問者の談話展開の方法について明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

情報収集の談話を対象に参加者の発話や方略を分析した先行研究には、横須賀（2000）、大塚（2005）、小林（2011）等がある。横須賀（2000：41）は、中級日本語学習者にホテルの宿泊料を電話で聞くというタスクをさせ、「情報の聞き取り」に使われたストラテジーを「聞き返し」、「応答」、「再質問」、「回避」に大別し、実態を分析した。その結果、『聞き返し』、『確認』、『問い返し』は母語話者との対話の中で起きた問題を訂正処理する方略として、『相づち』、『反応』、過剰なストラテジー使用の『回避』は円滑な会話の流れを維持する方略として有効であることを明らかにしている。大塚（2005）は、テレビのインタビュー番組を対象に司会者のあいづち的表現の使用を調査し、司会者は「あいづち詞」のみならず、「繰り返し」、「言い換え」、「先取りあいづち」、「先取り発話」というあいづち的表現を用いて番組を進行していると指摘している。テレビのインタビュー番組と大学広報紙のインタビュー取材の談話を対象にした小林（2011）は、「発

話機能」の組み合わせ等により談話構造を明らかにし、インタビュアーの発話や「発話機能」の使用傾向を分析した。その結果、インタビューの種類や参加者の役割、目的により「発話機能」の用いられ方が異なり、談話構造にも違いがあることを明らかにし、インタビュアーは、回答確認、〈事実説明〉や〈見解表明〉で前置きしてする質問、具体例を列挙してする質問等、特徴的な発話が観察されたとしている。以上のように、情報収集をする質問者は、目標を達成するために様々な方略を用いて、相手から必要な情報を聞き出していることが分かる。本研究では、先行研究で対象とすることが多い人為的なタスクやテレビ番組ではなく、自然談話を対象とする。

次に、本研究と同様に、韓国語母語話者を対象にした情報収集の談話の先行研究として梅木（2009）と高木（2013）を挙げる。梅木（2009：71）は、韓日接触場面で情報を求める発話連鎖について、質問を重ねる発話と自ら情報を提供する発話の頻度を会話参加者間で比較し、会話展開の仕方が異なるかどうかを検証した。その結果、「日本人は主に自ら情報を提供する発話により会話を展開させるのに対し、韓国人は自らの情報を提供する発話と情報要求を重ねる発話の両方を同程度用いる」と指摘している。高木（2013）は、日本語と韓国語の自然談話に現れる「繰り返し発話」の「発話形式」と「機能」について分析した。「機能」の分析においては、日本語では「共有型」、韓国語では「要求型」の談話展開が多く現れることを明らかにし、日本語話者は「くり返し発話」により先行発話に対する自己の感情や思考を表し、turnの譲歩を促すことで、結果的に対話者の発話を引き出すのに対して、韓国語話者は積極的な問いかけにより説明や確認を要求するという、談話展開におけるスタイルの違いについて論じている。本研究の接触場面でも韓国人上級日本語学習者を対象としているため、梅木（2009）や高木（2013）の結果と同様の発話や談話展開が観察される可能性があると予想される。

最後に、印象評価の先行研究を挙げる。会話の評価分析に関する研究には、原田（1998）、中井（2019）等がある。原田（1998）は、6名の留学生のロールプレイのVTRを一般の日本人に見せ、どのような点に注意するのかを調査した。調査は、VTRを見ながら自由に印象を述べ、上手だと思う順に番号を付けるという方法である。中井（2019）は、日本語教育経験者の大学院生と参加者とは別の日本人学部生に2つのインタビュー会話の動画を数回見せ、5段階評価と評価コメントを記入する印象評価シートを用いて調査を行った。また、参加当事者に事後インタビューをし、会話参加時の意識を述べてもらう方法を取っている。本研究は、中井（2019）と同様に、5段階評価を用いるが、中井（2019）は「参加態度・丁寧さ」、「質問内容」、「聞き手の反応の仕方」、「話題の繋げ方・展開のさせ方」、「非言語行動」、「事前準備」、「相互行為・協力体制」の7つの評価項目なのに対し、本研究は全11項目を設ける。また、第三者による印象評価の調査とは異なり、調査参加者である応答者が印象評価を行う。

3. 研究方法

3.1 談話資料の収集方法

本研究は、質問者と応答者の1対1の形式の就職活動に関する情報収集の自然談話を対象とする。就職活動中の主に3年生の質問者が、就職活動を経験した4年生の応答者Fから活動について情報収集をするという談話である。

表1に談話資料¹⁾の概要を示す。日本語の母語場面の【資料1】～【資料4】の4資料と、日韓の接触場面の【資料5】～【資料8】の4資料からなる全8資料（各資料約15分間、全8資料約2時間）の談話を収集した。調査協力者は、応答者である日本語母語話者1名（男性、応答者F）²⁾、質問者である日本語母語話者（Native Speaker 以下NS）4名（男女各2名、質問者NS1～NS4）と日本で就職活動をしている韓国人上級日本語学習者（Non Native Speaker 以下NNS）4名（男女各2名、質問者NNS1～NNS4）である。応答者は1名に限定し、応答者Fには質問者8名と会話をしてもらった。NNSの国籍と日本語レベルは、条件を揃える目的と筆者の教育経験により設定した。質問者と応答者は全員初対面であり、応答者には質問者の氏名を、質問者には応答者の氏名、学部、内定した企業の業種について事前に知らせておいた。

表1 談話資料の概要

資料番号	応答者 (就職活動経験者の大学生)		質問者 (就職活動中の大学生と留学生)	
【資料1】	応答者 F	4年生	質問者 NS1	3年生
【資料2】			質問者 NS2	3年生
【資料3】			質問者 NS3	3年生
【資料4】			質問者 NS4	3年生
【資料5】			質問者 NNS1	3年生
【資料6】			質問者 NNS2	3年生
【資料7】			質問者 NNS3	4年生
【資料8】			質問者 NNS4	3年生

調査は2012年12月に実施した。質問者には事前に、「15分間でできる質問を順番に箇条書きにして、メモを用意する」よう指示し、調査当日は、「メモ通りではなく、臨機応変に対応しても構わない」という指示をした。不自然さを避けるために、応答者には質問者の質問内容は伝えず、「就職活動について質問されるので、15分間話してください」と指示をした。各質問者には、相談の目的を強化するために、会話終了後、聞いて分かったことをワークシートにまとめてもらった。また、応答者には各質問者との会話終了後にチェックリストを用いて評価をしてもらい、後日、フォローアップインタビューで評価理由の詳細や印象を聞くという方法で印象評価を行った。以上の手順で調査を実施し、談話資料を収集した。

3.2 印象評価の調査手順

印象評価は、チェックリストとフォローアップインタビューの音声資料³⁾を用いる。表2に印象評価のチェックリストの項目を示す。チェックリストの評価項目は、「質問の仕方」、「聞き手の役割」、「進行の仕方」の3つの構成になっており、全11項目が設けられている。評価は「5非常に良い」～「1悪い」の5段階評価である。その他に評価理由を記入する「理由」の欄と設問①～③がある。「理由」と設問③は自由記述とし、詳細はフォローアップインタビューで聞くことにした。

表2 印象評価のチェックリスト

相手の名前		5段階評価	理由
質問	1	答えやすい質問内容だった。	5・4・3・2・1
	2	答えやすい質問の順番であった。	5・4・3・2・1
	3	1問1答でなく、質問を重ねて深く掘り下げることができた。	5・4・3・2・1
	4	相手が答えに困った場合、言い直しや例の提示など補助ができた。(なかった場合は未記入)	5・4・3・2・1
聞き手	5	あいづちを十分に使用できた。	5・4・3・2・1
	6	答えに対して、理解表示や理解確認ができた。	5・4・3・2・1
	7	答えに対して、感想や評価表明ができた。	5・4・3・2・1
進行	8	挨拶などをして会話を始めることができた。	5・4・3・2・1
	9	挨拶などをして会話を終えることができた。	5・4・3・2・1
	10	全体的な進行ができた。	5・4・3・2・1
	11	次の話題(質問)への転換がスムーズであった。	5・4・3・2・1

①十分に情報を提供できましたか。1～5を書いてください。_____

②やりとりはどうか。

5.全然難しくなかった 4.あまり難しくなかった 3.ふつう 2.少し難しかった 1.とても難しかった

③「2」「1」→どんなところが難しいと思いましたか。

フォローアップインタビューは調査日とは別の日に実施した。事前に応答者Fに文字化資料を送付し、気になった点に印を付けておくことを指示した。インタビュー当日は、会話の動画を見ながら、気になった点、違和感を持った点等を文字化資料の発話番号とともに確認し、そう感じた理由やどうすればよかったのか等を聞いた。また、どのようなことに注意して会話をしたか、答えやすい質問の仕方についても質問し、インタビューは4時間程度実施した。以上の手順で印象評価の資料を収集した。

4. 印象評価の分析結果

4.1 チェックリスト

応答者に課したチェックリストの5段階評価を表3に示す。設問4の「言い直しや例の提示」がない場合は未記入で、「—」となっている。

表3 応答者による質問者の5段階評価

資料	質問者	質問				聞き手			進行				平均値
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
		質問内容	質問の順番	質問の仕方	言い直しや例の提示 (ない場合は未記入)	あいづち	理解表示や理解確認	感想や評価表明	会話の開始	会話の終了	全体的な進行	話題転換	
【資料1】	NS1	5	5	4	4	5	5	5	5	5	5	4	4.7
【資料2】	NS2	3	4	4	4	5	5	5	5	5	5	4	4.5
【資料3】	NS3	5	5	5	—	4	4	5	5	5	5	5	4.8
【資料4】	NS4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5.0
【資料5】	NNS1	5	4	5	4	2	3	4	5	5	4	3	4.0
【資料6】	NNS2	3	3	3	2	2	3	4	5	5	3	3	3.3
【資料7】	NNS3	5	4	3	2	4	4	4	5	5	4	4	4.0
【資料8】	NNS4	4	4	3	—	3	4	4	5	5	3	2	3.7
全資料の平均値		4.4	4.3	3.6	3.5	3.8	4.1	4.5	5	5	4.3	3.8	4.3
NSの平均値		4.5	4.8	4.5	4.3	4.8	4.8	5	5	5	5	4.5	4.8
NNSの平均値		4.3	3.8	3.5	2.7	2.8	3.5	4.1	4.5	5	5	4.3	3.8

表3の下段にある全資料の平均値を見ると、全11項目では、「会話の開始」と「会話の終了」が5、「感想や評価表明」が4.5と高く評価されている。一方、「言い直しや例の提示」が3.5、「質問の仕方」が3.6、「あいづち」と「話題転換」が3.8と低く評価されているため、それらの項目について課題があることが分かる。

NSとNNSの平均値は、NSが4.8、NNSが3.8で、NSの方の若干高く評価されている。参加者別に平均値を見ると、最も高いのがNS4の5.0、最も低いのがNNS2の3.3である。全11の項目別にNSとNNSの平均値を見ると、大きな差があったのは「あいづち」と「言い直しや例の提示」であり、NNSが難しいと感じる技法である可能性が高い。項目別に数値を見ると、NSは3から5、NNSは2から5に評価され、資料によりばらつきがみられる。NSの中には、NNSよりも低い評価の項目があり、NNSの中には、NSよりも高い評価の項目があるため、NNSの評価が低いということは一概には言えない。

表4に、チェックリストの5段階評価の「理由」の欄に記されたコメント⁴⁾を3項目別に示す。1点目の「質問内容」については、評価が3と5がある。応答者Fは、評価3のNNS3について、「用意した質問をそのまま質問している様子。脈絡がなかった」とし、評価5のNS3について、「前の質問に関連した質問が続いた」とコメントしている。よって、応答者Fは準備していた質問を順序通りにする談話展開よりも、話題の流れに合わせて、前の話題に関連した質問をする談話展開の方が答えやすいと感じていることが分かる。この点については4.2.1で後述する。2点目の「聞き手の役割」については、相づちや感想、評価表明が少ない質問者に2を、多かった質問者には5と評価している。情報収集の談話は、「質問—応答」のみならず、相づちや反応が重要な役割をし、それらを使用することで円滑な情報収集の談話が展開されると考えられる。3点目の「進行の仕方」の「話題転換」については、「『次に』、『最後に』を使っていた」、「会話のとぎれ目をあまり感じなかった」という質問者を評価し、話を遮ったり、脈絡なく話題転換をする質問者を低く評価していることが確認できる。

表4 応答者による質問者の評価理由

	評価項目	評価	理由
質問	1 答えやすい質問内容だった。	3	1回の質問の中に2つの質問が含まれていたことがあった。(NS2)
	3 1問1答でなく、質問を重ねて深く掘り下げることができた。	3	用意した質問をそのまま質問している様子。脈絡がなかった。(NNS3)
		5	前の質問に関連した質問が続いた。(NS3)
	4 相手が答えに困った場合、言い直しや例の提示等補助ができた。(なかった場合は未記入)	2	こちらからのリフレーズが多かった。(NNS3)
聞き手	5 あいづちを十分に使用できた。	2	少なかった気がする。(NNS1)
		2	あまりなかった。(NNS2)
	7 答えに対して、感想や評価表明ができた。	5	相づちや感想が多かった。(NS4)
進行	11 次の話題(質問)への転換がスムーズであった。	2	話をさえぎって別の質問をする場面があった。(NNS4)
		3	脈絡なく話題が変わる時があった。(NNS2)
		4	「次に～」 「最後に～」を使っていた。(NNS3)
		5	会話のとぎれ目をあまり感じなかった。(NS3)

4.2 フォローアップインタビュー

フォローアップインタビューでの応答者Fのコメントをチェックリストの3項目である「質問の仕方」、「聞き手の役割」、「進行の仕方」に分類し、評価理由の詳細や会話参加時の印象をまとめる。また、本節では、フォローアップインタビューで応答者Fが指摘した参加者の発言や特徴

が顕著に表れている発話例を示しつつ、応答者が答えやすいと感じる質問者の談話展開の方法について考察する。

4.2.1 質問の仕方

まず、「質問の仕方」の評価項目「1. 質問内容」、「2. 質問の順番」についてまとめる。表5に評価が高いNS4と評価が低いNS2の質問を示す。

表5 NS4とNS2の質問

NS4の質問	NS2の質問
① Fの内定先	①就活中に頑張ったところとテクニック
②落ち込んだ時の対処法	②就活中で最も苦労したことと乗り切り方
③企業を選ぶ時の軸	③ESを書くときのテクニック
④エントリーの数、時期	④企業研究で調べたこと
⑤OB・OG訪問	⑤グループディスカッションの方法
⑥テスト勉強の有無	⑥面接での対処法
⑦活動を通してのよかったところと反省点	⑦就活を通しての軸
⑧情報収集の方法	

表5によると、NS4は前半に応答者Fの具体的な「①内定先」や就職活動の「③企業を選ぶ時の軸」、「④エントリーの数、時期」等、応答者Fの基本的な情報を聞いた上で、他の質問を重ねている。後半には、「⑦活動を通してのよかったところと反省点」、就職活動の「⑧情報収集の方法」について、応答者の経験を通しての意見を求める質問や対策についての質問をしている。一方、NS2の前半の質問は、「①就活中に頑張ったところとテクニック」、「②苦労したことと乗り切り方」、「③ESを書くときのテクニック」である。応答者Fは質問の順番について、NS4のように、「基本的なことを押さえてから、意見を聞く質問をしたほうが答えやすい」と述べていた。一方、NS2のように、最初から「テクニック」について「意見を求められると答えにくい」とし、「テクニックではなく、話の流れから『対策』や『工夫したこと』について聞くと答えやすくなるのではないか」と指摘していた。また、NS2の「①頑張ったところとテクニック」について、「2つの話題で関連がない質問を1度にされると答えにくい」、「分けて答えなくてはいけなかった」とコメントしていた。このように、「質問の仕方」は、「1. 質問内容」と「2. 質問の順番」が重要であり、本研究のような体験談を聞くような情報収集では、前半にテーマや相手の基本的な情報を押さえるために事実情報を聞く質問をし、後半に意見を求める質問や、助言、対策を聞く質問等、質問者自身に引き付けた質問をすると、応答者が答えやすいということが考えられる。

次に、NSとNNSの談話展開の方法についてまとめる。応答者FはNSの「3. 質問の仕方」の印象について、「前置きとか入り口の質問があって、その質問で話題を広げたらその話題で質問をしていって、それが終わったら次の話題に進んでいくっていうやり方が多かった。話の流れがあって予測しやすかった」とコメントしていた。一方、NNSに対しては、「一回質問したら、

そこからの展開が短かったり、まったくなかったりして、次の質問に行く傾向を感じた。話題が頻繁に変わるので、予測しにくかった」と述べていた。応答者 F が指摘するよう、「発話機能」に基づく談話分析⁵⁾においても、NS と NNS の複数の資料でそれぞれ同様の談話展開が観察され、NS と NNS の質問者の談話展開の方法に違いがあることが確認された。NS は、「質問-応答-反応」や「質問 1-応答 1-反応 1+質問 2…」のように、一つの話題において、応答に関連した質問を重ねる等の発展した発話のやりとりをしており、質問者と応答者の双方向のやりとりから談話が形成され、相互行為を意識した談話展開になっている。一方、NNS は、ある話題 1 の「質問 1-応答 1」から、別の話題 2 の「質問 2-応答 2」というように、質問者の「質問」と応答者の「応答」の発話連鎖から形成される談話展開であることが明らかになった。これは、高木（2013）の日本語話者は「共有型」を好むのに対し、韓国語話者は「要求型」を好むという指摘と同様の結果になっており、本研究では、母語である韓国語の談話展開の特徴が、日本語の談話展開にも影響したということが示唆される。応答者 F は NNS の談話展開について「話題がころころ変わると答えるのが難しい」とコメントしていた。そのため、日本語の情報収集の談話は、多くの話題を提示し、それに対応する応答を収集する「質問— 応答」を繰り返す談話展開よりも、一つの話題において発話を重ねて掘り下げるような談話展開の方法を取るほうが応答者にとって情報提供しやすい可能性が高い。

また、「質問の仕方」について応答者 F は、質問者が「自分の情報を話しながら質問をすると、答えやすい。どういうことに興味を持っているのかが分かったと、その話題に触れながら答えることができる」とコメントしていた。この特徴が表れている発話例を例（1）と例（2）に示す。左から発話番号、発話者、発話例である。

(1) 「【資料 3】 質問者 NS3、応答者 F）

- 98 NS3 えーと、なんだ、あの、ES とか、今、書き出したんですけど、
 99 F はい。
 100 NS3 どういうことに注意していけばいいですか？
 101 F やっぱり、その、志望動機っていうのは、その会社ごとに考えるしかないので、
 102 F なんととも言えないんですけど、

(2) （【資料 3】 質問者 NS3、応答者 F）

- 36 F あのー、海外に行けるような企業で // 探してたんですね。
 37 NS3 うーん。
 38 NS3 はい。
 39 F だから、そのー、食品だけじゃなくて、
 40 F もちろん、商社とか。
 41 NS3 はい。

- 42 F 実は、商社に一番行きた // かったんですけど、
 43 NS3 あ、そうなんですか。
 44 F 商社とか、あと、ま、ほんとに銀行とかも // 色んな業界受けましたねー。
 45 NS3 うんうん。
 46 NS3 あー、私も K 学部 なんて、
 47 F はい。
 48 NS3 なんか、2 回ぐらい留学行ったんで、
 49 NS3 結構、海 {くしゃみ} 外行きたいなとかって思ってた、
 50 F はい。
 51 NS3 食品って結構海外行けるんですか？
 52 F 食品はそうですね、

応答者 F は、例 (1) の 98NS3 の「今、ES とか書き出した」というように、「活動状況を言ってもらえると、その活動について具体的に答えられる」とコメントしている。例 (2) では、質問者 NS3 が応答者 F の応答に反応し、49NS3 で「私も海外に行きたい」という共通の話題を提供している。このような質問者の情報提供や共通の話題は、応答者の答えを促す働きがあると考えられる。そこで、日本語の会話の授業でも情報収集をする技法として取り扱うことを提案したい。

4.2.2 聞き手の役割

「聞き手の役割」については、「5. あいづち」や「6. 理解表明・理解確認」、「7. 感想・評価表明」の表現を用いている質問者のほうが評価が高い傾向があり、全体的に NNS より NS の質問者のほうが多く用いていた。応答者 F は、「質問の後に、反応、感想、笑いをしたほうが話しやすい」、また、「(自分の答えを) 理解したことが分かるし、この答えでいいんだと思う」と述べていた。例えば、評価の高い NS3 の発話である上記の例 (2) では、38NS3 「はい」、43NS3 「そうなんですか」、37NS3 「うーん」、45NS3 「うんうん」等、様々な表現の相づちを用いて談話を展開している。また、例 (3) のように応答に対する感想や反応をする発話もある。

(3) 【資料 4】質問者 NS4、応答者 F)

- 329 NS4 OBOG 訪問した時ってのは、結構人のコネとかっていうのをよく聞くんですけど。
 330 F いや、僕は // 先輩、全然いなかったんで、
 331 NS4 キャリア、
 332 NS4 キャリアセンター、
 333 F 名簿見て、
 334 NS4 あ。
 335 F A 大学の // 電話して、

- 336 NS4 {笑い} 電話して、あー。
- 337 F 頑張りました。
- 338 NS4 あー、{笑い} 大変でしたね。
- 339 F すごい緊張します。
- 340 F でも、1回電話 // 始めたら、
- 341 NS4 はい。
- 342 F ほんと結構 // 楽になるんで、
- 343 NS4 はい。
- 344 F 最初の1本目だけ緊張 // します。
- 345 NS4 緊張しますよねー。

例(3)は質問者 NS4 が応答者 F に、OB・OG 訪問の約束を取るために先輩に電話したことについて、338NS4「大変でしたね」、345NS4「緊張しますよね」と反応する例である。このように、応答者 F の応答に対して見解や評価を表明したり、共感する発話例は母語場面の全4資料に見られ、接触場面では少なかった。NNSの質問者は質問をするという役割に重きを置き、応答者との相互作用が希薄な談話展開の方法になりがちであると考えられる。応答者 F は「相づちや反応がないと不安」、「間違っていることを答えてるのか、理解していないのかと思う」と述べていた。ただし、NS4の「なるほど」を連続して使用している発話については、「『なるほど』が頻繁だと軽く受け止められているような感じもする」とも言っていた。また、NS1の「あー」という相づちのみで、次の話題に移行する発話に対しては、「『あー』だけでは理解しているか不安」と答えており、NNS3とNNS4の質問者に対しては、「反応や感想がなくて次ってなると不安」、「話題と話題のつなぎ目に反応がほしい」ともコメントしていた。そのため、会話の授業では、「聞き手の役割」として相づちの種類の紹介のみならず、適切なタイミングでの使用方法や、応答の発話に対する反応の仕方の練習も取り入れる必要がある。

4.2.3 進行の仕方

「進行の仕方」の「11. 話題転換」については、応答者 F は低く評価した NNS4 の発話について、「反応がなく、次の話題に変わると、次の話題が推測できなくなる。自然な話題転換があるといい」とコメントしており、NNSの質問者の唐突な話題転換に不自然さを感じたとコメントしていた。ただし、NNS3については、チェックリストの「理由」にも記述しているが、「『次に』、『最後に』を使って話の流れがあった」と評価していた。これらの表現は、談話の進行に有効であり、日本語の授業の学習項目として取り扱うことが多い。他の発話例にも、これまで聞いた話題を「～と聞いたんですけど、」と示すもの、応答者の先行発話を「先ほど～とおっしゃってんですけど、」で反復するもの、これから話す話題をについて「～について聞きたいんですけども、」で予告するもの等の表現も観察された。このようなメタ言語表現で前置きを用いて話題を進行させるこ

とで、唐突な話題転換を避けることができると考えられる。そのため、これらの表現も授業で取り扱うことを提案する。

以上、「質問の仕方」、「聞き手の役割」、「進行の仕方」の3項目について、応答者Fのフォローアップインタビューのコメントと発話例を挙げながら、質問者の談話展開の特徴をまとめた。

5. 結論と今後の課題

本研究では、日本人学部生と留学生の就職活動の情報収集の談話を分析対象に、応答者が答えやすいと感じる質問者の談話展開の方法について探った。応答者のチェックリストとフォローアップインタビューの印象評価を分析した結果、チェックリストの評価項目である「質問の仕方」、「聞き手の役割」、「進行の仕方」の3項目で、複数の特徴を見出すことができた。

本研究のような体験談を聞くような情報収集では、「質問の仕方」については、前半に事実情報を聞く質問をし、テーマや相手の基本的な情報を押さえ、後半に意見を求める質問や、助言、対策を聞く質問等、質問者自身に引き付けた質問をすると、応答者が情報提供しやすいことが分かった。情報収集をする際は、段階的な質問を心がけて応答を予測した吟味された質問項目を準備し、談話の全体的構造を考える必要がある。また、質問者からの情報提供も応答者の発話を促すために効果的であることが分かった。談話展開の方法については、多くの話題を提示し、それに対応する応答を収集する「質問—応答」を繰り返す談話展開よりも、一つの話題において、応答に関連した質問を重ねて掘り下げるような談話展開の方法を取るほうが応答者は答えやすいことが明らかになった。そこで、会話の授業では、事前に用意した質問にとらわれず、一つの話題において複数質問を準備させ、話の流れに合わせて適宜、質問を追加、調整して情報収集をする練習や、応答者の応答を意識して臨機応変に対応する練習も必要と考える。「聞き手の役割」については、相づちの種類や使用するタイミングが重要となる。また、NNSの場合、「応答」から発展した発話のやりとりや、「応答」に対する感想、共感を示す反応が少ないという傾向が認められたため、授業では、応答者の発話や反応等、応答者との相互作用を意識して談話展開をする練習を取り入れることを提案する。「進行の仕方」では、メタ言語表現や前置き表現を使用することで、応答者に唐突な話題転換を感じさせることなく、話題を進行することができることも確認できた。

以上のような特徴を踏まえ、日本語の会話教育では、応答者との相互作用に基づいた談話展開の方法を学習することが必要だと考える。今後は、複数の談話を対象に第三者を含めた印象評価を行い、その分析結果を日本語の会話教育のための教材開発に応用したいと考えている。

注

- 1) 談話は調査協力者の許可を得て、録音、録画をした。収集した談話は、ザトラウスキー（1993）

- と鈴木（2009）の文字化の規則を参考に文字化した。
- 2) 応答者Fの内定先は、日本の食品メーカーの企業である。
 - 3) フォローアップインタビューの音声は調査協力者の許可を得て録音し、文字化した。
 - 4) 応答者Fのチェックリストの「理由」のコメントは、記入する時間が限られていたため、特に印象的だった項目のみを記入してもらった。そのため、全質問者、全項目のコメントは記入されていない。評価理由についての詳細はフォローアップインタビューで述べてもらった。
 - 5) 情報収集の談話の「発話機能」を用いた談話分析の結果は、小林（2018）を参照のこと。

*本研究は、科学研究費助成金（若手研究）「相互作用を意識した会話教育のための教材開発」（研究代表者）（課題番号：20K13089）の研究活動の一部である。

参考文献

- 梅木俊輔（2009）「ターン管理と発話連鎖への期待に関する一考察——韓日接触場面における情報要求場面を中心に——」『言語科学論集』13、71-82.
- 大塚容子（2005）「テレビのインタビュー番組におけるあいづち的表現——ポライトネスの観点から——」『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編』44、55-69.
- 加藤好崇（2000）「日本人母語話者と日本語学習者のインタビュー場面における言語管理の研究」『東海大学紀要』20、57-69.
- 小林友美（2011）「日本語のインタビューの談話の構造分析——大学広報紙のインタビュー取材の談話を対象に——」『比較日本学』23、77-105.
- 小林友美（2017）『日本語教育のための情報収集の談話の展開方法——韓国人日本語学習者の会話教育の提案——』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文
- 小林友美（2018）「日本語の情報収集の談話の展開方法——大学生と留学生による就職活動の相談の談話を対象に——」『日本語・日本語教育』2、39-55.
- 斉藤里美（1989）「日本語教育における疑問文・質問文——コミュニケーション上の機能からみた日本語教材の課題——」『日本語学』8-8、41-56.
- 佐久間まゆみ（2003）「第5章 文章・談話における「段」の統括機能」『朝倉日本語講座7文章・談話』朝倉書店 pp.91-119
- 佐々木由美（1998）「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話-同文化内および異文化間コミュニケーションの場面」『異文化間教育』12、110-117.
- 鈴木香子（2009）『機能文型に基づく相談の談話の構造分析』早稲田大学モノグラフ11a 早稲田大学出版部
- 高木文也（2013）「日本語と韓国語の自然談話に現れる『くり返し発話』」『待遇コミュニケーション研究』10、52-67.
- 中井陽子（2019）「日本人学部生によるインタビュー会話における聞き手の技能——印象評価・会話データ分析・フォローアップインタビューをもとに——」『東京外国語大学論集』98、73-101.
- 原田明子（1998）「一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するか」『北海道大学生留学生センター紀要』2、157-168.
- ポリリー・ザトラウスキー（1993）『日本語の談話の構造分析-勧誘のストラテジーの考察』くろし

お出版

横須賀柳子（2000）「情報取りにおける聞き手のストラテジー」『ICU 日本語教育センター紀要』
10、41-57.